



傘寿とて恋よ宴よ秋耕よ
 検見には非ず萱ねずみ調査隊
 草の露星姓多き檜枝岐
 プラトンの言葉は海や鳥渡る
 アザランド行きどころなきガザ秋冷
 傾きて走る吾なり十三夜
 杭掛けの獅子舞ふごとし出羽の国
 銀杏散る詩の行間を行くごとし
 無花果煮焦がすゴブリン棲む厨
 哀しみの降り積むところ螢草
 車椅子降りて人魚や夜のプール
 名月やシーシャガウガウ島つ子等
 思ひ切りどんぶや回し魂迎
 竹節虫の自切きつぱり祈るごと
 水澄むや天壤無窮梓川

*

奥山源丘
 栗原利代子
 我妻民雄
 篠遠早紀
 芳川莞久子
 金子圭子
 宮岡光子
 吉澤清
 飯島千花梨
 佐竹伸一
 山崎和之
 渡久山和子
 有賀日出子
 古畑富美江
 永田良子

露草や雀集まる庭が好き
 人類の生れし夜と同じ月光
 組板の菜屑あををあを草雲雀
 手に入れて退屈な恋めがるかや
 名月を見て唯我論捨てにけり
 けふからは旅するやうに草の花
 飛驒育ち宿雛南瓜のほっこほこ
 かつて幌馬車深き轍に木の実降る
 文弱は褒め言葉なり鳥渡る
 立ち枯れて姥百合の血の濃くなりぬ
 一と夜ごと星の沁み入る林檎かな
 畳冷ゆ柩のやうに琴置かれ
 黙禱に始まる腑分露の星
 糸電話しようか妻よ夜の長き
 とんぶりや食感ぶりこ秋田人

木下めぐみ
 三品吏紀
 篠遠良子
 森山夕香
 西澤日出樹
 牧野真知子
 長瀬絹代
 石井紀美子
 関禮
 宮澤羅夢
 西牧千恵子
 大野今朝子
 有手勉
 大澤淳基
 今野晶子

新たな半世紀へ

—— 岳俳句十二月

同人集・岳集から (556)

宮坂 静 生

巻頭言 今年化学分野でノーベル賞を受賞された錯体化学の北川進先生が若い日に「莊子」を勉強され、その大事な理念「無用の用」が研究に役立ったことをいっておられる。どのように役立ったのか専門分野は承知しないが、視野が広がったことを説いておられる点に感激した。端的にいうと、着想である。人が思いもかけない有機と無機の間に目をつけられ、無用と思われた点に着眼された。飛躍を承知でいうとこれは実と虚の俳句の発想ではないかと勝手に気持ち躍ったのである。

カザが気になる。瓦礫の山。なぜ戦闘は止められないのか。

アザーランド行きどころなきガザ秋冷 芳川莞久子

「アザーランド」とは「ノー・アザー・ランド」(故郷は他にない)。二〇二四年ベルリン国際映画祭で第九十七回アカデミー賞長編ドキュメンタリー賞を貰った映画である。パレスチナ人の青年が、ヨルダン川西岸のパレスチナ人居住地の現状を写真に撮り、世界に発信することで戦争を止めさせようとする。それを助けるイスラエル人のジャーナリストの敵同士の青年二人が育んだ命がけの友情の話。ぐさり現代の核心を突く作品に揺さぶられた。久しぶりの快作である。

傘寿とて恋よ宴よ秋耕よ 奥山 源丘

すのが当然。二十四時を二十五時目指して生きる。時に十三夜月も愛でながら。演劇人の覚悟である。

杭掛けの獅子舞ふことし出羽の国 宮岡 光子

みちのく出羽の天日乾し、稲架掛けである。杭に横木を渡し、稲を積み込む。藁を纏い人が立つようなさま。稲ぼちちとも。「獅子舞ふ」の比喩に気合が入り、斬新である。

銀杏散る詩の行間を行くことし 吉澤 清

銀杏並木が黄落する。躍動感ある見事な比喩である。「詩」はヴェルレーヌよりも漢詩人白居易の風情か。

無花果煮焦がすゴプリン棲む厨 飯島千花梨

意地悪な小悪魔が厨にいて無花果煮を邪魔する。現代人の利口な楽しい想像ではないか。これも生きる知恵。

今月の秀句

思ひ切りどんぶや回し魂迎 有賀日出子

信州中南信の辰野地域などに残る迎盆の行事「どんぶや回し」。地貌季語である。青年が藁火(万燈)に火をつけて廻し、あの世から仏を迎える勇壮な光景に、これぞ生者と死者との共同演出ではないかと、珍しい盆行事を改めて身近にした。「どんぶや回し」の音感にも土俗性があり、惹かれる。

八十歳傘寿早々の作者を巻き添えに米寿界限のお祝いをし貰った。その実感句。「恋よ宴よ」のるるん気分が健在。それに日々の秋耕が安らか。老けてなどいられないという意気軒昂なところに共感する。

検見には非ず萱ねずみ調査隊 栗原利代子

物々しい調査隊。米の出来具合を調べる検見の風情であるが、萱原の萱ねずみの棲息状況を調査している学術団体だという。作者得意の生態観察詠。野生を生かした知的な作。

草の露星姓多き檜枝岐 我妻 民雄

地名が一句の眼目。檜枝岐村は南会津、人口五百人に届かない雪深い山村。露の秋、姓の星姓が多いとはころり納得という句。言い伝えでは平安時代の藤原氏落人の末裔とか。焼畑・山菜取、狩による観光が村を支える。作者得意の山村詠。

プラトンの言葉は海や鳥渡る 篠遠 早紀

初々しい。青春さな。真実は一つ、愛は一体など溢れるようにプラトンの箴言が思い出される。あれもこれも知りた。胸中は海。読書の秋から鳥渡る秋へ。行動派である。

傾きて走る吾なり十三夜 金子 圭子

歩くのはまだるこい。「傾きて走る」。このせわしさが日常の生き方だ。ことを成し遂げようと思えば、無理を自分に課

哀しみの降り積むところ螢草 佐竹 伸一

名山朝日山系の山麓住まいと伺い、この山国人の自然からの日矢を感受する日常がわかる。私も山国に住み、時に路傍の螢草にも涙する。「哀れ地に咲く花菜にも」の思い。

車椅子降りて人魚や夜のプール 山崎 和之

大胆な変身だ。人目を避けて夜のプールへ。これがリハビリテーションでもある。考えに考えて仕立てた人魚の作。

名月やシーシャガウガウ島つ子等 渡久山和子

宮古島平良地区での旧八月十五夜の子供の行事。手作りのシーサー(獅子)を被り家々を回り、厄除けの舞いを披露する。加わりたくなる楽しさいっぱい。

竹節虫の自切きつぱり祈ること 古畑富美江

外敵から身を守るために脚を切るといふ七節虫に驚いた。七節虫にしても命がけであらう。気づきが鋭い。

水澄むや天壤無窮梓川 永田 良子

「天壤無窮」とは天地とともにいつまでも続く意。檜ヶ岳から流れ出す清流梓川を称えた句。今夏、九州直方から、作者が一度は見たいと弟さんと上高地に旅をし、「岳」の故郷に触れたという。堅い四字の漢語であるが、その意気込みを感じて紹介した。

文弱は、誉め言葉なり鳥渡る 関 禮

「文弱の徒」とは古風な言葉。芸文に打ち込む徒は肉体的にも精神的にもいざという時に、迫力不足、用をなさないという。あまり現今では用いられないが、敢えてこれを褒め言葉として見直したいという。賛成である。「文弱」とは、実践力を誇示する戦時体制のもとで、逼塞した芸文の徒とのイメージがある。現代の欲を張り合う荒んだ世相にあえて、粘り強く文弱で行こうという。

作者は俳句の興隆を考え、敢えて古風な言い方を探し出してきたようだ。ドン・キホーテ的な振る舞いがいじらしく、私は共感している。渡り鳥への思いには作者の世を渡る感慨が込められている。

人類の生れし夜と同じ月光 三品 吏紀

今月の秀句

露草や雀集まる庭が好き 木下めぐみ

平凡な日常詠であるが、自分の気持ちを俳句に表現したいと精いっぱい生きようとする作者に共鳴した。借り物の言葉でなく、自分の言葉を見つけるのは意外に苦勞する。ここから俳句が始まるという素朴な作り方を評価して置きたい。

内に籠らないでルンルン気分で行きたい。花野には草の花。はっと驚く、そんな気持ちになりたい。作者は画家。気分を昂揚させることを常に求めている。日常の知恵がある。

飛驒育ち宿儺南瓜のほっこほこ 長瀬 絹代

松本から高山市へ入る直前が丹生川地区。その名産が糸瓜のような灰緑色の宿儺南瓜。宿儺は古代飛驒の伝説上の怪人であるが「宿儺さま」と愛され、ほっこ南瓜の名につく。ご当地ソングとでも言いたい句。活躍を期待する。

かつて幌馬車深き轍に木の実降る 石井紀美子

欧化文化の窓口横浜風景か。幌馬車が通る。地面に深い轍をつけて。秋は木の実が降る。初々しい時代があった。あこがれという言葉が生きていた。進歩という言葉も信じられた。日本はあれから美風や良俗を失った。束の間の夢であったか。

立ち枯れて姥百合の血の濃くなりぬ 宮澤 羅夢

日陰に群落をなす姥百合。縄文以来の花だけに生命力が旺盛だ。枯れても血が濃く、球根は隆々。来年は亡霊のような蒼白の花をわんさと咲かせるだろう。

ひと夜ごと星の心み入る林檎かな 西牧千恵子

林檎は空の星の光の結晶とは見事な着想である。秋も深まり星は一段と煌く。林檎は冷たく張り、齒応えが冴える。

曇冷ゆ樞のやうに零置かれ 大野今朝子

スケールが大きい。月光だけは地上の人類誕生以来不変だ。思えば月光是すべて承知だ。人類は月の子である。地球は借りている舞台。地球を荒らし放題とは月が悲しむ。

組板の菜屑あをを草雲雀 篠遠 良子

リリーと必死の草雲雀の鳴き声を耳に台所で青菜を刻んでいる。厨俳句であるが、この寸時の仕事を愛しんでいる積極性に同感した。作者が癌の治療に専心していることは句からはわからない。しかし何かに賭けているかのような映像に緊迫感がある。そこを感じて取り上げた。いい句である。

手に入れて退屈な恋めがるかや 森山 夕香

雌刈萱は湿地に多い一メートルほどのイネ科の多年草。これは中年過ぎの恋か。風になびくまま、成りゆきで恋になり、作者は乗り気でも相手はゆったりムード。贅沢な感じ。捨てるつもりもないがもっと追ってこないかなと退屈ムード。雌刈萱を出し、いささか藪の中。作者も老練である。

名月を見て唯我論捨てにけり 西澤日出樹

名月を見て感動したのである。自分の意識だけは信じるに足る。すべては意識の産物と自分以外の存在を認めない哲学は狭いと気づいたという。他人は自分と同じ人間だ。胸襟を開いていこう。名月を見ながら自分を鼓舞している。

けふからは旅するやうに草の花 牧野真知子

〈冬の日や臥して見あぐる琴の寸〉(野澤節子)があれば置かれた琴は樞のよう。誰がひくのであろうか。

黙禱に始まる腑分露の星 有手 勉

厳肅な光景である。夕方から始まる腑分け。法医学の解剖か。どこまでもリアルに、作者は一句で何を問うたものか。

糸電話しようか妻よ夜の長き 大澤 淳基

他界の妻のもとへ。糸電話がいい。そちらも退屈かな。

とんぶりや食感ぶりこ秋田人 今野 晶子

「とんぶり」とは帚木の実。ぶちぶち感が野生の感触だ。「ぶりこ」はハタハタの卵。秋田の人はとんぶり・ぶりこ好き。みちのく秋田名物は何でもいけますねえ。熱燗で、まあいっパイ。

推薦候補作を掲げる。

今年米鉈彫佛の御手をこぼれ 川村 五子

秋風や岩に並べて売るピアス 上村 敦子

指それて乗りつく風や夕蜻蛉 飯塚えり子

銀漢や熊楠の眼の粘つきし 吉沢さよ子

蓑虫の贅雨の日は雨を着る 原田 宏子

米寿の身冬の砂漠に入ることし 倉科 繁登

一雨に息整ふや鳳仙花 漆戸 洋子